「古典」からみた大学改革　－「無用の用」の先へ

藤本夕衣（日本学術振興会特別研究員RPD:慶應義塾大学）

０．これまでの歩み　―自己紹介にかえて―

・問い方の模索：比較教育学から教育哲学、政治哲学へ

・大学改革の現場における大学改革批判：FDの下働き＋博論執筆

→大学の独自の存在意義とは何か？

１．大学改革における人文学の危機

・日本の大学における急速な大学改革（1991年大学設置基準の大綱化～）

→「社会に開かれた大学」、説明責任、授業評価、PDCAサイクル、GPAの導入

←有用性の重視≒評価の短期化、可視化

→短期的な成果の示せないもの、可視化できないもの＝無用

＝人文学の危機[1]

２．「古典」の意義

❖「無用の用」という言葉以外に、人文学の今日的な意義を提示する可能性は？

←戦略的に「古典を読むことの意義」を問う

⇔古典＝エリート段階の大学にふさわしいもの≒時代遅れ

←M・トロウの枠組み：エリート／マス／ユニバーサル

「教養主義の没落」：70～80年代（エリート身分文化の無意味化）[2]

＋「現代思想」の流入による影響があるのでは？

アドルノによれば「難解なもの、手に負えぬものこそお誂え向きだと思っている学生の無邪気さの方が、それだけが思想を唆るものであるのに、複雑なものに手を出す前に単純なことを弁えていなければならない、と指でおどしながら思想を警める世の大人たちの狭い了見よりも、懸命なのである」（三光長治訳）。なにも、象牙の塔にこもって一対一で難解な古典と対峙するのがいいと言うのではない。読者が常に間主観性において存在し、テクストが常に間テクスト性において存在する以上、白紙の心をもつ読者がテクストそれ自体と向き合うという図は、幻想にすぎない。むしろ、アドルノの言う「無邪気さ」を「ガキッぽさ」と読みかえつつ、ヤジウマ的に本と付き合えばよい。『資本論』なんて、どう見ても寝転がって読むようにできているのだ。（浅田彰『構造と力　―記号論を超えて』1983年、21頁）

３．「ポスト・モダン」という枠組み

・J=F・リオタールの枠組み：「大きな物語の失墜」＝「ポスト・モダン」

「大きな物語」の失墜＝＜科学の発展＝社会の発展＞の自明性が崩れる

→「科学の正当性」の喪失→近代の大学の理念の揺らぎ

参考＞近代の大学：自然科学の導入により成立

←ユニバーサル化・グローバル化とは異なる観点からみた「現代の大学」の問題

４．アラン・ブルームとリチャード・ローティの「大学の物語」

A・ブルーム　*The Closing of the American Mind*　＝保守的な立場の大学論

R・ローティ　『哲学と自然の鏡』、*Achiving Our Country* ＝左派、ポストモダニスト

←シカゴ大学時代の同窓生（ともに 1946 年早期入学。L・シュトラウスのもとで学ぶ）

※両者とも、「近代の大学の理念」が失墜したことをふまえ、「民主主義」の可能性を追求しつつ、「大学」という場のあり方について考察し、「古典」の重要性を指摘している。

表１　ブルームとローティの大学論のポイント

項目	A・ブルーム	R・ローティ
一般的分類	右派、保守主義者	左派、ポスト・モダニスト
中心的テキスト	The Closing of the American Mind, 1987	Philosophy and he Mirror of Nature, 1979, Achieving Our Country, 1998
近代民主主義の限界点	歴史主義による決断主義（ファシズム）の招来	形而上学の失敗によるユートピアへの希望の喪失
R・シュトラウスの「近代性の危機」の課題との関係	継承＝反歴史主義	離反＝歴史主義の徹底
ポスト・モダンの大学の病理	学生の知的好奇心の喪失	無味乾燥な知識の集積、社会的な事柄への関心の欠如
病理への対処法＝古典の意義	時代を超えた問いを学生に想起させ憧れを喚起する	同時代の社会以外の社会がありうることへの希望を与える
ポスト・モダンの大学の条件＝大学独自の存在意義	社会との緊張関係を保ち、時代をこえた問いに触れる場	社会からの一時的な避難所として、未来への希望を培う場

(1)「大学」に関する問題意識

❖ブルーム：学生の「無関心」(知的好奇心の喪失)、「コミットメント」

コミットメントとは、意思ないし自己のうちだけに原因をもつ空虚な選択である。若者は、愛や自然が人生に意味を与えるものとして不十分なために、代わりにその意味を与えるものとしてコミットメントを欲している。彼らの話題はコミットメントでもちきりだが、この話題にたいした意味がなく、コミットメントが空気よりも軽いのではないかという意識につねにつきまとわれているのである。[3]

←慣習の衰退、「ニーチェ主義」の広まり（≒ニヒリズムの道徳化、相対主義の絶対化）
＝「哲学」の忘却　（「ソクラテスの哲学」-「自然」≠「現代の大学の哲学」-「歴史」）

われわれは哲学者であることはできないけれども、哲学を愛することはできる。われわれは哲学しようと試みることはできるのである。[4]

❖ローティ：「博識」「傍観者」
←「文化左翼」（≠改良主義的左派）の広まり≒「アイロニスト」
＝「リベラルユートピアへの希望」の喪失

多くの新進気鋭の若い文学教師たちは、どんなことでも嘲笑できるが、何も希望することができず、すべてのことを説明できるが、何ごとにも心酔できない。[5]

(2) 大学論・古典論

❖ブルーム：近代の大学＝「理性の故郷（the home of reason)」
←近代民主主義（「啓蒙主義の企て」）と不可分な関係にある。
社会と緊張関係を保った場≒民主主義社会では得られない経験の重視
←日常では問うことのできない「時代を超えた問い」（哲学的問い）を知る場
⇒グレート・ブックスという古典の意義

大学の活動には、ひとつの単純な規則がある。すなわち大学は、民主主義社会において得られるような経験を学生に提供する仕事にたずさわる必要はない、という規則である。どのみち学生はそうした経験を得るだろう。大学が学生に与えなければならないのは、民主主義社会においては得られない経験である。トクヴィルは、いにしえの著述家たちが完全無欠である、と信じたのではない。自分たちが不完全だということをわれわれに最も自覚させる能力が彼らにはある、と信じたのである。これがわれわれにとって重要なことなのだ。大学がこの機能を十二分に果たしたことは一度もなかったが、いま

や事実上、それを試みようとさえしなくなってしまった 。[6]

❖ローティ：高等教育＝個性化（初等中等教育＝社会化）
　　避難所としての大学、人文学
←偶然性を自覚しつつも、インスピレーションを得る場
⇒「偉大なる文芸作品」という古典の意義

私たちは、文学作品を正統と認める様々な聖典（canons）が一時的なものであることを快く認めるべきである。しかし、だからといって私たちは偉大さの観念を放棄すべきだということにはならない。偉大な文学作品は、それが偉大であるので多くの人にインスピレーションを与えてきたとみなされるべきでなく、多くの読者にインスピレーションを与えてきたので偉大であるとみなされるべきである 。[7]

５．「大学」という日常へ

❖「大学改革」とは、異なる「大学の物語」をいかにかたり継ぐのか？
→「学生のニーズ」の捉えなおし：「就職に役立つことを学びたい」は本当なのか？
「社会に開かれた大学」の問い直し：「社会」とは何か？[8]
「教育工学的な授業観」ではない「授業観」の模索
「よく計画デザインされた授業」：知の構造化、評価の可視化、打ち解けた雰囲気
→「深い思考の場としての講義」：問い、分からないことの評価、緊張感

---

[1] 西山雄二『人文学と制度』未來社、2013 年。
[2] 竹内洋『教養主義の没落』中央公論新社、2003 年。
[3] Bloom, A. *The Closing of the American Mind: How Higher Education has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*, New York: Simon & Schuster, 1987, p.109. [A・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉　―文化と教育の危機―』菅野盾樹訳、みすず書房、1988 年、111 頁]
[4] Strauss, L. (1989) *Liberalism Ancient and Modern: Foreword by Allan Bloom*, Chicago: The University of Chicago Press, p.7. [L・シュトラウス (2006)『リベラリズム　古代と近代』石崎嘉彦、飯島昇蔵訳者代表、ナカニシヤ出版、10 頁]
[5] Rorty, R. *Achieving Our Country: Leftist Thought in Twentieth-Century America*, Cambridge: Harvard University Press, 1998, p.127. [R・ローティ『アメリカ　未完のプロジェクト―20 世紀アメリカにおける左翼思想―』小澤照彦訳、晃洋書房、2000 年、137 頁]
[6] Bloom, A. , *op.cit*, p.256. [A・ブルーム、前掲書、285 頁]
[7] Rorty, R., *op.cit*, p.136. R・ローティ、前掲書、149 頁]
[8] 藤本夕衣「『社会』にたいする『大学』の責任を問う　―『アカウンタビリティ』という責任回避」京都文教大学人間学研究所『人学研究』14、2014 年、62-70 頁。2013 年度人間学研究所主催公開シンポジウム 共催:京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト「大学教育の視点から本学の教育を考える」「日本の大学、このごろ焦ってませんか? ～『社会に役立つ大学』の価値を問う～」